日蓮大聖人御書全集

妙一女御返事（みょういちにょごへんじ）

（事理成仏抄（じりじょうぶつしょう））

新版2131～2134

妙一女御返事（事理成仏抄）

弘安3年('80)10月5日　59歳　妙一女

去ぬる七月中旬の比、真言・法華の即身成仏の法門、大体註し進らせ候いしその後は、一定法華経の即身成仏を御用い候らん。さなく候いては、当世の人々の意得候無得道の即身成仏なるべし。不審なり。先日書いて進らせ候いし法門、能く心を留めて御覧あるべし。

その上、即身成仏と申す法門は、世流布の学者は皆一大事とたしなみ申すことにて候ぞ。なかんずく予が

門弟は、万事をさしおきてこの一事に心を留むべきなり。建長五年より今弘安三年に至るまで二十七年の間、在々処々にして申し宣べたる法門繁多なりといえども、詮ずるところは、ただこの一途なり。

世間の学者の中に真言家に立てたる即身成仏は、釈尊の説くところの四味三教に接入したる大日経等の三部経に、別教の菩薩の授職灌頂を至極の即身成仏等と思う。これは、七位の中の十回向の菩薩の歓喜地を証得せる為体なり、全く円教の即身成仏の法門にあらず。た

といい経文にあるよしを訇るとも、歓喜行証得の上に得たるところの功徳を沙汰する分斉にてあるなり。これ十地の菩薩の因分の所行にして、十地・等覚は果分を知らず。円教の心をもって奪っていえば、六即の中の名字・観行の一念に同じ。与えて云う時は、観行即の事理和融にして、理慧相応の観行に及ばず。あるいは菩提心論の文により、あるいは大日経の三部の文によれども、即身成仏にこそあらざらめ。生身得忍にだにも云いよせざる法門なり。

されば、世間の人々は、菩提心論の「ただ真言の法の中に

のみ」の文に落とされて、即身成仏は真言宗に限ると思えり。これによって、正しく即身成仏を説き給いたる法華経をば「戯論」等云々。止観の五に云わく「たとい世を厭う者も下劣の乗を翫び、枝葉に攀附し、狗の作務に狎れ、獼猴を敬って帝釈となし、瓦礫を崇めてこれ明珠なりとす。この黒闇の人、あに道を論ずべけんや」等云々、この意なるべし。歎かわしきかな、華厳・真言・法相の学者、いたずらにいとまをついやし、即身成仏の法門をたつることよ。夫れ、まず法華経の即身成仏の法門は、竜女を証拠と

もんお　そくしんじょうぶつ　しんごんしゅう　かぎ　おも　まさ　そくしんじょうぶつ　と　たま　ほけきょう　けろん　とううんぬん　しかん　ご　い　げれつ　じょう　もてあそ　しょう　はんぷ　いぬ　さむ　な　みこう　うやま　たいしゃく　がりゃく　あが　みょうじゅ　こくあん　ひと　どう　ろん　とううんぬん　こころ　なげ　けごん　しんごん　ほっそう　がくしゃ　暇　費　そくしんじょうぶつ　ほうもん　立　そ　ほけきょう　そくしんじょうぶつ　ほうもん　りゅうにょ　しょうこ

すべし。提婆品に云わく「須臾の頃において、便ち正覚を成ず」等云々。乃至「変じて男子と成る」。また云わく「即ち南方の無垢世界に往く」云々。伝教大師云わく「能化の竜女に歴劫の行無く、所化の衆生もまた歴劫無し。能化・所化ともに歴劫無し。妙法経力もて即身成仏す」等云々。

また法華経の即身成仏に二種あり。迹門は理具の即身成仏、本門は事の即身成仏なり。今、本門の即身成仏は「当位即ち妙なり。本有にして改めず」と断ずるなれ

ば、肉身をそのまま本有無作の三身如来と云える、これなり。この法門は一代諸教の中にこれ無し。文句に云わく「諸教の中においてこれを秘して伝えず」等云々。

また、法華経の弘まらせ給うべき時に二度有り。いわゆる、在世と末法となり。修行にまた二意有り。仏世は純円一実、滅後末法の今の時は一向本門の弘まらせ給うべき時なり。迹門の弘まらせ給うべき時は、すでに過ぎて二百余年になり、天台・伝教こそ、その能弘の人にてましまし候いしかども、それも、はや入滅し給いぬ。**日蓮は、**

今、時を得たり。あにこの所嘱の本門を弘めざらんや。本迹二門は、機も法も時も遥かに各別なり。

問うて云わく、日蓮ばかりこのことを知るや。

答えて云わく「天親・竜樹、内に鑑みるに泠然たり」等云々。天台大師云わく「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」。伝教大師云わく「正像やや過ぎ已わって、末法はなはだ近きに有り。法華一乗の機、今正しくこれその時なり。何をもってか知ることを得る。安楽行品に云わく『末世の法滅せん時』と」云々。これらの論師・人師、末法闘諍堅固の時、

地涌出現し給いて本門の肝心たる南無妙法蓮華経の弘まらせ給うべき時を知って、恋いさせ給いて、かくのごとき釈を設けさせ給いぬ。

なおなお即身成仏とは、迹門は能入の門、本門は即身成仏の所詮の実義なり。迹門にして得道せる人々、種類種・相対種の成仏、いずれもその実義は本門寿量品に限れば、常にかく観念し給え。正観なるべし。

しかるに、さばかりの上代の人々だにも即身成仏には取り煩わせ給いしに、**女人の身として度々かくのごとく**

法門を尋ねさせ給うことは、ひとえに只事にあらず。教主釈尊、御身に入り替わらせ給うにや。竜女が跡を継ぎ給うか。また憍曇弥女の二度来れるか。知らず、御身はたちまちに五障の雲晴れて、寂光の覚月を詠め給うべし。委細はまたまた申すべく候。

弘安三年十月五日　　日蓮　花押

妙一女御返事